

# 回想-北薩・串木野地域広域調査

浦島幸世<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

広域調査が終わるといふ。このことは、北薩・串木野地域の金鉱床探査では、菱刈鉱床の発見を含む一つの時代を区切ることになる。この広域調査の経過と内容については、資料に基づく記録、いわゆる正史が残されるに違いない。

ここに記すことは、広域調査をめぐる私の個人的な思い出である。それにしても、もっと適切な方がいらっしゃるはずだが、お亡くなりになったり、ご病気だったり、ご都合がつきにくいなどのために、私にまでお鉢が回って来たらしい。あなたは古い、と言われても嬉しいわけではないが、1952年4月に、串木野、荒川、大口の3鉱山を訪れて、塩原幹治さんや池田富男さんからご教示を頂いたときが、そこで鉱床探査をなさっていた方々と私、北薩の金鉱床と私のお付き合いの始まりである。

この一つの時代、広域調査の間に亡くなった先輩友人、同志の追悼にもなろうかという思いが、お引き受けする私自身への言い訳の中にあつた。もはや、文献・記録は手元に乏しく、記憶はおぼろげになっている。査読を経ても、文責は私にあるので、ご迷惑をおかけする方々には、あらかじめ、お詫びを申し上げる。

## 2. 一杯のコーヒーから

札幌通産局鉱業課長の浦上六郎さんがお見えになった。1967(昭和42)年の初め、そのころ北海道大学にいた私の研究室は幅2mプラスアルファだから、スマートな浦上さんも、棚のすきまを縫うような思いをされたに違いない。

コーヒーをおすすめしながら、金山の現況と国が鉱床を探すことについて、お話を伺い、ご質問にお答えした。初めてお会いしたけれど、私は九州に2回出かけたことがあったので、福岡通産局から移って来られた浦上さんと、お話を合わせる事ができてよかったという記憶がある。

2度目か3度目にお見えになったとき、浦上さんはコーヒーご持参でいらっしゃった。帰りぎわの「ご無礼します」のお声は今も残っている。

その頃の事情について、浦上さんは『金山対策について』という記録を残された。次に、それから抜書きをさせていただく。

“当時の(福岡の)鉱業課長の篠崎さん、それから38年5月その跡を継いだ私は、鉱業課長会議のつど、金鉱山に対する助成策の強化を要望し続けた”

“40年に至って6月の鉱業課長会議の席上、当時の本省の鉱業課長であった加納さんから、「そんなにうるさくいうのなら、どうすればよいか九州で考えて来い」という言葉をついに貰った”

“すぐさま九州地方鉱山会の金山部会長の有田さん(三井串木野鉱山(株)社長)、鉱山会常務理事の横田さんと協議、(中略)現地調査も鉱業課の総力をあげて実施し、その年の12月に『九州の金鉱業について』というPR誌をまとめあげ、これを本省等関係先に配布した”

“41年2月(中略)、有田さんと横田さんがいっしょに上京、私の立会いで本省に陳情することになった。(中略)加納さんに金鉱山の実情について、かなり突っ込んだ質問を受け、いよいよ金山の出番も近いという強い印象を持った”

“42年1月、私は札幌の鉱業課長に転勤したが、赴任まもなく2月の鉱業課長会議を前に、本省か

1) 鹿児島大学名誉教授

キーワード: 広域調査, 北薩・串木野地域, 金鉱床, 菱刈鉱山, 金属鉱業事業団



第1図 浦上六郎さん。金鉱業対策準備のころ、福岡と札幌の通商産業局鉱業課長を歴任。2003年2月23日死去。奥様から頂いたお写真。



第2図 左から、串木野鉱山の福井平之丞さん、地質調査所の佐藤壮郎さん、秋田大学の松隈寿紀さん、串木野鉱山の若林健介さん、東京教育大学の徳永正之さん。金銀鉱床研究会。串木野鉱山。1968.10.15.撮影。

ら、(中略)案を持って来いという指示が来た”

“各金山の探鉱はかくあるべきであるという案を作成、(中略)加納さんから、「札幌の考え方でないとだめだ。これで行こう」と言われ、これまで苦労した甲斐があったとホッとした次第である”

鹿児島県では、あとで記すように、県庁などの動きがあった。また、鉱山会社も、金鉱業振興協会そのほかを通じて、関係先に対し、基礎的地質調査の実施を働きかけた。

こうして、1968年の南薩地域に始まる金鉱山を対象とする調査が行なわれ、広域調査、さらに、精密調査に発展していったのである。

大分県で広域調査が行なわれていたとき、津久見に居られる浦上さんに、電話でお誘いしたことがあった。

「現地検討会に、お顔を見せて下さいませんか」

「いや、老兵は遠慮しますよ」

浦上さんは2003年2月23日にお亡くなりになった。前年の11月に電話でお話したときには、私は予想もしなかったのに、第1図は奥様が送って下さったお写真である。

### 3. 往復6日の旅

「焼酎代はおれが持つ」

こんな誘いに釣られるはずのない私が、1968年10月、札幌から鹿児島にやって来た。

その年に通商産業省鉱山石炭局がまとめた『金鉱山緊急合理化対策資料』には、次のように示さ

れている。

「12の金鉱山を対象とし、抜本的な探鉱を行なう」

「鴻之舞-沼ノ上および南薩の基礎調査は金属鉱物探鉱促進事業団に委託して調査を行なわせる」

二つの地域の地質調査を請け負ったのは、住鉱コンサルタント(株)である。この会社に、北海道大学の同級生小林直樹さんがいた。

「初めてコンサルタントが請け負うので、今後のためにも、赤字覚悟でいい仕事をする。この調査に顔を出さないとはいわせない。でも、旅費は出さないよ、焼酎代は……」

となったのである。

10月8日まで、彼といっしょに鴻之舞-沼ノ上地域を歩いていた。下旬には、南薩地域の調査に入れて頂くことにして、15日朝、串木野鉱山に着いた。

この機会に、金銀鉱床研究会の仲間が集まったのである(第2図)。秋田大学の松隈寿紀さんと東京教育大学の徳永正之さんは、鹿児島県の金鉱床研究の先達で、もっとご教示を頂きたかったのに、菱刈鉱山をご覧にならないまま、お亡くなりになった。地質調査所の佐藤壮郎さんは、菱刈鉱床発見時の金属鉱業事業団広域調査課長である。この会は、南薩の春日、赤石、岩戸の3鉱山と北薩の大口、布計の両鉱山を見学した。

19日に、私だけ枕崎に向かい、住鉱コンサルタント(株)の方々と合流した。22日まで、清川 求さんの運転で、南薩各地の旧坑付近を走りまわること

ができた。まだ工事中の指宿スカイライン周辺では、住友金属鉱山(株)の調査が行なわれていた。黒仁田鉱山や花籠鉱山を見たことは、あとで、鹿児島県全体の金鉱床がいつできたのかを検討するために役立った。

「疲れるから、帰りの航空券を手配するよ」

「いや、大丈夫」

自費出張だから、その金(かね)を私は持っていなかったのだ。こうして、往復だけで6日間、6,000kmの列車と連絡船の旅は終わった。1年半後に、鹿児島大学に転勤して、広域調査に加わることを、そして、道産子が鹿児島で老いることを、そのときは全く知らない私であった。

余談になるが、明治の北海道開拓に、鹿児島県出身者が大きくかかわったという。1968年のこの調査を含む昭和と平成の鹿児島県の金鉱床探査と金山の発展の過程には、道産子、北海道の学校を出た人、また、北海道の鉱山にいた人がかなり多く見え隠れる。

南薩地域でこの年度から3年間、また、新名称の金属鉱業事業団により、北薩地域で昭和50年度から3年間行なわれた基礎調査の結果は、『金鉱山の基礎的地質鉱床調査報告書』にまとめられた。南薩地域地質調査の相談相手になって居られた鹿児島大学の早坂祥三さんは、北薩の調査から設けられた検討員の原型であったということもできる。小林さんたちが目指したように、コンサルタントが請け負う仕組みが定着して、金属鉱業事業団が実施する南薩地域と北薩地域の広域調査に引き継がれた。

1968年に、鉱山以外の人でも話題になったことは、政府が金を1g 405円で買い上げる制度の停止であろう。流通価格は1g 660円であった。それらの差額も探査に関係した。

#### 4. おやっとなさあ

鉱山は地元で好印象を持たれているとは限らないので、広域調査に協力が得られにくいことが起きた県があるかもしれない。鹿児島県は終始良いお付き合いができたようである。鹿児島県庁の鉱工課に居られた大迫陽一さんから、国が金山の再開発に動き始めた頃のことを教えて頂いた。

鹿児島県は、その事業を積極的に受け入れて、



第3図 愛媛大学の宮久三千年さん。1983年2月6日死去。愛媛大学の小松正幸さんを通じて皆川鉄雄さんから頂いたお写真。

国のお金をたくさん頂こうと、資料の準備と陳情に協力し、基礎的地質鉱床調査の関係市町との調整に努めた。そして、1969年に、鹿児島県、関係市町、関係鉱山、関係鉱業権者が会員の鹿児島県金鉱山合理化対策事業推進協議会が発足した。会長は県知事で、会の中心になる副会長は三井申木野鉱山(株)社長の有田貞二郎さんである。大迫さんはそのそばにいる機会が多かったという。私は後になってから、有田さんの美声のそばにいる機会があった。

「いわゆる大物の山師が何人も活躍していてね、さまざまな情報が交錯していた頃ですよ」

最近の大迫さんのお話には、私が耳にした名前も含まれ、広域調査の間にも、そういう人の話題があった。

鉱工課は、県内の鉱山について、その歴史と地質鉱床を調査し、資料に基づく記録を残すことを企画した。愛媛大学の宮久三千年さんを中心に、鹿児島県と鉱山の人とも加わって行なわれたこの事業の成果は、いくつもの報告書として、1970年前後に、鹿児島県と鹿児島県地下資源開発促進協会から発行された。これは、広域調査と同じように、学官民が連携した仕事であった。報告書はその後の広域調査にとって重要な資料となった。

宮久さんは、昭和50年度から3年間、北薩地域の基礎的地質鉱床調査の検討員をなさった。その後、病氣療養中の宮久さんにお会いしたとき、

「金の注射も副作用があつてね」

と寂しそうだったが、1983年2月6日にお亡くなりにな



第4図 大口鉱山休山前の池田富男さん。下牛尾坑内。  
1977.8.25.撮影。



第5図 珪化岩大露頭。九州大学の井澤英二さん(左)  
とG. Taylorさん(右)。串木野市冠岳南西方。  
1984.4.9.撮影。

なった。第3図は愛媛大学に残るお写真である。

広域調査が始まってから、1978年に、前記の協議会の名称が鹿児島県金鉱床探鉱促進協議会(今の事務局は工業振興課内)に変わった。この会は、毎年、次年度の政府予算に関して関係機関に要望し、広域調査および精密調査に協力し、現地検討会に参加した。

この協議会は、各鉱山探査現場担当者会議をもち、現地検討会の状況そのほかの意見交換や話題提供が行なわれた。私も出席させていただく有益な機会であった。

広域調査に関係する市や町は協議会の会員で、鉱床発見の期待もあって、受け入れに協力した。菱刈町長の久保 敬さんはとても熱心で、白髪と大声が目立ち、私もあとでときどきつかまって、気合を入れられた。

ほとんど問題にならなかった事故を一つ。

1978年11月、前の年に閉じた大口鉱山の池田富男さん(第4図)と私は大口鉱山の南方で、空中電磁波調査のヘリコプターを見上げていた。それが地上10mに装置(バードという)を吊り下げて、平地から稜線に飛び去って間もなく、池田さんが走り去った。バードが立ち木に引っかかったらしい。すぐ回収して吊り上げたので、騒ぎにはならなかった。

広域調査は、大きなトラブルを耳にしないうまま、その終了を迎えることができた。金属鉱業事業団、作業を請け負った業者、鉱山会社、それから、地元の関係者の皆様に敬意を表したい。

「おやっとさあ」(おつかれさま)

## 5. ここ掘れワンワン

1979年2月末、サンフランシスコで、私はアメリカ最大の金山を持っていたホームステイク社の探査部長、J. A. Andersonさんに会った。環太平洋ゴールドラッシュのさきがけになった西部の鉱床を発見したすぐ後である。

「日本の金鉱床を見たい。鴻之舞、佐渡はどうか」  
「今は、串木野と南薩型をおすすめする」

早速、串木野鉱山の斎藤正夫さんに電話して、ご了解をいただき、Andersonさんは鹿児島に行ってきた。どちらもとても興味深かったようである。

持ち帰った話題の一つに、串木野鉱床の東に位置する冠岳の大珪化帯があった(第5図)。その下はどうなっているのか。

広域調査の現地検討会では、

「理論的に熱水作用の強い場所として期待する」という発言のほかに、

「確かめる必要はあるけれど、経験的にはねえ」というつぶやきもあった。

理論も経験も支えあって大切。思い込みにならないように。たまたま、平成元年度から、大分県で広域調査が始まる時、意見を求められたので、その機会に、鹿児島県の各地域にも、新人を推薦させていただいた。私が検討員でなくなるときの準備ができた。

話題は1980年11月に戻る。

現地検討会で、検討員が菱刈の試錐予定地の視察に出かけた(口絵1参照)。キャンキャンと盛んに





第6図  
菱刈の鉱脈発見の新聞記事。  
南日本新聞、1981.5.7.

ほえながら、われわれについて来た子犬がいた。北薩の調査の初期から裏方の苦勞を担って来られた住友金属鉱山(株)の塚原 登さんも覚えて居られると思う。

「花咲じいさんのここ掘れワンワンだったかも」  
あの犬は、金が見つかったら、行方知れずになつたらしい。

1981年5月に、菱刈の金鉱床発見が公表(第6図)されてから、テレビ、新聞、週刊誌などの記者に会う機会があった。熱心な人もいたけれど、予備知識をもたずに、

「広域調査はここ掘れワンワンだから、今度はどこで見つかるか教えてくれ」  
という感じの人もいた。

「菱刈の場合と同じような情報が得られても、金鉱床を指示するとは限らないので、……」

こんな人には、こういう説明など通じない。

NHK <sup>さんだい</sup>川内通信部の森永満郎さんはとても勉強家で、金属鉱業事業団の人のほかにも詳しく取材し、郷土の金鉱床を理解して正確に報道したいと、日本鉱山地質学会(現:資源地質学会)に入会された。森永さんが退職されたためか、現地検討会や菱刈鉱山初荷の様子が、平成15年度には、テレビで見ることができなかった。

鹿児島県内の新聞が報道した菱刈鉱床発見の記事は、全国紙のそれより大きくはないし、翌年、

「埋蔵鉱量が佐渡金山以上」

と発表されても、年末の県内十大ニュースには扱

われなかった。江戸時代の山ヶ野金山の例を挙げるまでもなく、二十世紀初頭の大口金山の売上高が鹿児島県歳出総額に匹敵した時代とは違って、年間数十億円の産業がいくつもある近頃、雇用人数が少なく、生産されるものが目立たない鉱山は、話題になりにくいかもしれない。

金は佐渡金山とゴールドパーク串木野で採れる、と思っている人も少なくない。私は、鉱物資源の知識が乏しい文系の学生を相手にして、広域調査のことにも触れる授業を、平成15年度まで続けてきた。

菱刈鉱山は見学者用のビデオを作成した。私はそれを授業に使わせていただいた。金属鉱業事業団の雑誌に近藤皓二さんが金鉱床の解説を連載し、九州大学の井澤英二さんが金鉱床の、また、私が金山の、それぞれ、一般向きの本を書いた。それでも、関係者以外の読者数には限りがある。広域調査全体として、多くの人々に対する説明や宣伝がもっと上手だったらよかったのに。

## 6. プロジェクトG

### 6.1 菱刈金鉱床が見つかるまで

「日本一の菱刈の金は、だれがどうやって見つけたのか」

よく質問される。いつも私は口ごもる。一言では答えられないから。

“広い分野のたくさんの人による理論と技術のチ

ームワークの成果だ”

1983年4月の新聞には、私はこう書いた。間違っ  
てはいないつもりだが、これで満足する人が多い  
とも思えない。

住友金属鉱山(株)の西沢徳雄さんと茨城謙三  
さん、同じく近藤皓二さん、金属鉱業事業団・住  
友金属鉱山(株)の論文や『住友鴻之舞金山史』  
(2003)などには、その探查経過が詳しく述べら  
れている。組織の仕事として取り上げられること  
が多い。ここでは、人の仕事として、その時々、内  
輪話を耳にしたこと、そして今はうろ覚えや思い違  
いになっているかもしれないことにもお許しを願  
い、テレビ番組のプロジェクトXを少しまねたプロ  
ジェクトGoldにしてみよう。

1750(寛永3)年、馬越山田村に金気があって試  
掘した、という記録が残っている。これは今の菱刈  
鉱山付近のことらしい。1903(明治36)年頃、山  
田鉱山の採掘が始まり、「もと宗火」という高品位粘土  
質石英脈と幅は広いが低品位の脈があったとい  
う。昭和10年代に、木村 涼さんの鯛生金山(株)  
の薬師五郎さんや新井友蔵さんが調査し、下部開  
発計画が作られた。しかし、おそらく社内事情と  
1943年の金鉱業整備令のために、それは実施され  
なかった。

1952年から1973年にわたり、大口鉱山の池田富  
男さんたちが度々、また、住友金属鉱山(株)の小林  
直樹さん西沢徳雄さんたちがこの地域を調査し、下  
部に金鉱床がある可能性が大きいことを報告した。

その期間中に、鉱区の問題があった。布計鉱山  
(株)が、社長石黒元夫さんのとき、1968年に、この  
鉱区を入手した。各鉱山会社が鉱区を検討整理す  
る情勢の中で、この鉱区を引き継いだ鯛生鉱業  
(株)社長の山下 忠さんが固守した。探查屋さん  
たちの努力が報いられた。広域調査は、主に、鉱  
山会社の鉱区、すなわち、鉱業権が設定されてい  
るところが対象となった。

1980年11月の広域調査現地検討会で、金属鉱業  
事業団広域調査課長の佐藤壮郎さんが提案した。

「重力探査、電気探査、空中電磁波探査の結果  
に基づき、旧坑地帯下部に対して、試錐を実施  
する」

鉱脈を直接狙うことは、制度としては広域調査の  
主な目的ではなかった。



第7図 住友金属鉱山(株)の橋本浩治さん。菱刈鉱床  
発見のときは、金属鉱業事業団。2002年7月6日  
死去。奥様から頂いたお写真。

「地質構造を調べるためと、地化学探査の試料  
を得るために、という名目でよからう」

検討会はゴーサインを出した。

さっそく12月からこの試錐が始まった。大口鉱床  
付近に似ている火山岩を抜けて、深度275.5mか  
ら、基盤岩(四万十累層群)に入った。北薩では、  
基盤岩中の金鉱床は知られていない、5mほど掘  
り進んだら、機械が故障してしまった。予定深度に  
ほぼ達している。ところが、連絡を受けた金属鉱業  
事業団(住友金属鉱山(株)から出向中)の橋本浩  
治さんは掘進継続を佐藤さんに進言した。

橋本さんは、1999年には、鴻之舞鉱山時代のこ  
とや海の写真のお便りを下さったが、2002年7月6  
日に、お亡くなりになった(第7図)。

さて、掘進を再開して間もない2月、深度291.70m、  
けつ岩(粘土が堆積した岩石)の間から、脈巾15cmの  
石英脈が出てきた(口絵2参照)。大口鉱山の池田  
富男さん、村木直行さん、川野 明さんの目に狂い  
は無い。

「ここにトジ金もある」

きっと、身震いするほどのうれしさだったに違  
ない。私も、2年がかりで見当をつけた地点の溝掘  
りで、新しい鉱脈の頭を見つけたときに立ち会っ  
て、感動したことがあるが、池田さんたちのそれま  
での苦勞、いや、執念とは比べものにならない。

大口金山の分析結果は、Au 290.3g/t、Ag  
167g/tという高品位であった。情報を受けた僅か  
な人々に、どよめきが起こったはず。

この試錐の場所は、その後設けられた浄水施設



第8図 菱刈鉱床の試錐コア。金属鉱業事業団の現地検討会。大口鉱山。1981.12.7.撮影。

あたりと推定される。記念碑があってもいいと思う。

次の年度に実施された2本の試錐(第8図)も、精密調査の段階を飛ばして、企業探鉱で行なった多くの試錐も、すべて高品位鉱脈に当たった。初期の頃、住友金属鉱山(株)の近藤皓二さんから電話が入った。

「四万十層の金はだめだという話もあるが」

「そんなのは学説じゃない。お互いに、基盤中の金を知っていますね」

鉱脈ができる場所が、たまたま、基盤岩だったと思えばいい、と一致した。

## 6.2 菱刈開山

鉱床は見つかった。しかし、それは地下深部で、高温の湧泉も予想される。探鉱費の上に、巨額の開発費が必要だから、経営者が決断しなければ、鉱山は始まらない。当時、住友金属鉱山(株)の副社長で、菱刈鉱山建設本部長をなさった藤森正路さんが、ずっと後になってから、ご夫妻で鹿児島に見えたときに、ゆっくりお話を伺うことができた。

「茨城君の説明を信用したよ」

信頼された茨城謙三さんは、1981年から、菱刈の探査にかかわってきた。1982年に、会社が金量120tを公表するときに、試錐資料から、大胆に推定することを担当したのもこの人である。

こうして、日本一の金山ができることになった。今まで、金山では、鉱脈が見つかった部分から掘り進んだ。鉱床の全体があらかた分かり、環境影響調査を経て開発に着手する例は、日本の金山では、



第9図 菱刈鉱山の斜坑口の工事。1982.12.16.撮影。

初めてである。

斜坑口の工事(第9図)を見たときには、地下の鉱脈を想像して、胸がときめいた。斜坑から分かれた水平坑道に、どのレベルでも、見事な鉱脈が現れた(口絵3参照)。

たまたま、私が日本鉱山地質学会賞審査委員長のとき、会長が近藤さんだったので、菱刈鉱床の探査は審査の対象にならず、二人の任期が終ってから、昭和62年度に、学会技術賞が金属鉱業事業団と住友金属鉱山(株)に与えられた。検討員として加わった団体や作業を請け負った企業の関係者も含まれる、私はそう思いたい。

ここにお名前を挙げ切れなかった人々を含めて、金鉱床が好きな、金鉱床に好かれる、そして、目立ちたがらない人々が菱刈鉱床の発見と開発に貢献した。このことを、始めの質問に対するお答えにするつもり。

広域調査による大規模高品位金鉱床の発見が国内外に広く伝わると、菱刈鉱山は千客万来となった。私もご迷惑をおかけした一人である。

1986年、日本鉱山地質学会に、金銀鉱床と地熱系の関係を研究する委員会ができた。鹿児島大学と共催したシンポジウムの参加者が菱刈鉱山から給湯された湯之尾温泉に入り、鉱山を見学した。翌年、オーストラリアで開かれた国際会議の見学旅行先が、なんと遠い九州の金鉱床と地熱になったので、この委員会が英文のガイドブックを作った。

鹿児島の出版社からせきたてられた『金山 鹿児島は日本一』(1993)も、広域調査が無ければで



第10図 住友金属鉱山(株)の近藤皓二さん。菱刈鉱山40mLE2B瑞泉1-2脈E。1987.5.18.撮影。2003年6月5日死去。

きなかった本である。近藤さんと、昭和61年度まで検討員だった早坂さんが名文を寄せて下さった。

近藤さん(第10図)は、「体調を崩した」と書き添えた年賀状を下されたあと、2003年6月5日に、お亡くなりになった。

金属鉱業事業団が日本の金鉱床の広域調査に2桁億円、そして、企業が3桁億円のお金をかけて、得られた埋蔵金量はおよそ4桁億円になろう。菱刈鉱山は産金量が多いだけでなく、開発環境も自慢できる。北薩・串木野地域の広域調査は成功して終わった。毎年の報告書として、記録も残った。誇りにしていい。

菱刈鉱床発見後、4分の1世紀になろうとしている。金鉱床関係の論文がこんなにたくさん出た時期は無かった。でも、菱刈の鉱量は増えたが、国内では、新しい場所に、掘ることができる金鉱床は見つからなかったことを、省みなくてもよいだろうか。

鹿児島大学を退職するとき、前記の各鉱山探査現場者会議で、鹿児島県庁の前野昌徳さん、菱刈鉱山の鈴木良一さん、島津興業の上野隆正さんから、私の標本の保管について、ご高配をいただいたことも忘れられない。今、鹿児島大学総合研究博物館が、その標本を整理登録していて、広域調査の記録の一助になることを望んでいる。菱刈鉱

山が寄贈して下さった巨大鉱石標本もある(口絵4参照)。

広域調査は、多量の試錐コアをもたらした。標本として保存されるものは、ごく少ないだろう。埋蔵文化財は全て保存されるという。そのような扱いを受けないコアの運命は悲しい。

## 7. おわりに

1970年に、受け身で鹿児島島に転入して来たが、広域調査に参加させて頂き、日本金鉱業史の最大事件に、時と場所をいくらか共にする呼吸ができて、私はとても幸運で、ありがたいことと思っている。

佐藤 彬さんや中村研治さんほか金属鉱業事業団の方々たちのお心遣いをいただきながら、昭和62年度の佐渡地域や平成2年度の北海道北部B地域の現地検討会に、私も加えていただき、また、平成元年度に始まった広域調査委員会(委員長は元金属鉱業事業団の関根良弘さん-年賀状に「夫婦して介護に暮れる歳の末」を残して、2004年5月24日にお亡くなりになった)や、平成8年の金属鉱業事業団の報告会で、広域調査全体を考えさせられた。報告会で意見を求められ、寝不足だったせいか、つい辛口になって、自ら落込んだこともある。

北薩・串木野地域の現地検討会では、私はあまり発言しなくなり、その懇親会で乾杯の挨拶をする係だった。苦し紛れにひねり出した言葉がある。

「金に好かれる調査をしましょう」

世代交替のために、だんだん、調査を見守るだけの私になった感じがする。退官してから民間の形になっていた検討員は平成6年度で終わったが、見守る気持ちは残った。

お世話になったたくさんの方々に、心より感謝する。

URASHIMA Yukitoshi (2004): Memories of Regional Geological Structural Survey: Hokusatsu-Kushikino Area.

<受付: 2004年7月12日>